

令和元年6月16日現在

機関番号：34307

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15884

研究課題名（和文）高校生における精神保健問題の早期介入へ向けた学校と精神科医療・看護の連携のあり方

研究課題名（英文）Collaboration of the staff of schools with professionals in psychiatric care to intervene early for high school students with mental health problems

研究代表者

河野 由理（KAWANO, Yuri）

京都光華女子大学・健康科学部・教授

研究者番号：50363916

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：小中高生の精神保健問題への学校における支援に関する国内外の文献レビューの結果、養護教諭による児童生徒の精神保健問題への支援は、心の健康問題のサインを捉えること、問題の予測、子どもの状態の把握、保健室での関わり、巣立ちの機会をつくることのプロセスがあり、それぞれの段階で連携が行われていた。高校生の精神保健問題への養護教諭による支援と学校内外の連携について明らかにすることを目的として、養護教諭を対象に質問紙調査を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究期間内に実施した研究によって、高校生における精神保健問題や精神障がいの特徴、学校において養護教諭が生徒の精神保健問題のサインを捉えて、どのような支援を行っているのか、学校内の教職員、管理職、および学校外の保健医療福祉の専門職との連携の現状と課題などについて明らかになった。これらの結果により、高校生の精神保健問題に早期に気がつき、学校内外で教職員や保健医療福祉の専門職等が連携しながら適切な支援を行うための重要な示唆を得た。

研究成果の概要（英文）： This study clarified that the interventions for pupils with mental health problems by school nurses were to notice signs of their problems, predict their problems, understand their conditions, support them in the health rooms, assist them in returning their classrooms, and cooperate with other health care and medical professionals based on the results of previous studies. We conducted a self-administered questionnaire survey for school nurses to clarify how to support high school students with mental health problems and cooperate with the other staff of schools and health care professionals.

研究分野：精神保健看護学

キーワード：精神保健 早期介入 精神看護 地域ケア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 欧米先進諸国では1960年代から精神科病床数が減少し始め、近年は地域生活を継続しながら必要な精神科治療およびケアを受けることが主流となっている。そのなかで精神病未治療期間が短いことと長期的予後がよいことの関連が報告され、その期間を短くするための早期発見、早期治療の取り組みが欧米諸国で開始されている。その結果、入院者数や入院期間の減少、生活機能レベルの改善、就労率の増加、自殺率の減少などが確認されている。

(2) わが国では、欧米先進諸国と比較して人口千人あたりの精神科病床数が多い現状であり、入院中心から地域生活中心へという施策のもと、アウトリーチ活動など精神障がい者が地域で生活できるよう支援を進めている。あわせて近年、わが国においても精神障がいの早期発見、早期介入の重要性が指摘され、若年者を対象としたメンタルヘルスリテラシーの教育的介入や精神病の前期症状に関する実態調査等が実施されている。

(3) 若年者の精神保健問題に最初に気がつく、または相談を受けて適切な支援を行う上で、養護教諭は重要な役割を果たしている。しかしながら、海外および国内ともに、精神保健問題の好発年齢である高校生とその保護者に対する、学校保健の専門職である養護教諭が行う支援の実際と課題、ならびに学校と一般科および精神科医療機関、児童相談所等の若年者の精神保健問題に関わる保健医療福祉の専門職との連携について明らかにした研究は少ない。

2. 研究の目的

(1) 就学している年代の精神保健問題をもつ対象者への保健、医療、福祉、教育における支援および連携の実際と課題を明らかにする。

(2) 高校生の精神保健問題の特徴とその関連要因、並びに養護教諭が精神保健問題をもつ高校生やその保護者にどのような支援をしているのか、学校内の担任教師、管理職などの教職員や、学校外の保健医療福祉の専門職とどのような連携を図っているのか、その現状と課題を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 学校において養護教諭が児童生徒の精神保健問題にどのように介入しているのかに焦点をあてて、関連する国内および海外の発表論文の知見と課題をまとめる。

医療機関における就学している年代の精神保健問題をもつ患者へのケアについての先行研究の知見を踏まえて、医療機関における就学している年代の患者および家族へのケアについて看護職およびケースワーカーに半構造化インタビュー調査を実施する。

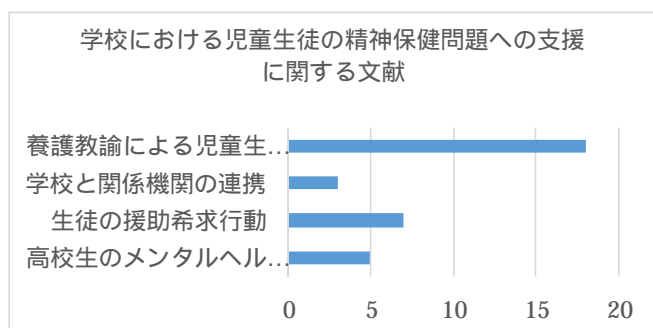
(2) 精神保健問題をもつ高校生に対する、養護教諭の対応の頻度やその内容について明らかにするため、精神保健問題をもつ生徒の特徴、養護教諭による当該生徒への対応、学校内での他教職員との連携、ならびに学校外の一般科および精神科医療機関や児童相談所等との連携の実際と課題などについて、高等学校に勤務している養護教諭を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施する。

4. 研究成果

(1) 学校における児童生徒の精神保健問題への支援に焦点をあてて、幅広く国内および海外の文献レビューを行った。海外の文献についてオンラインデータベースを用いて検索を行った結

果、12件が該当した。一方、国内文献では21件が該当した。学校における児童生徒の精神保健問題への支援に関する文献は、小学校、中学校、高等学校それぞれで研究が少なかった。

(2) それらの文献は内容に沿って、【高校生のメンタルヘルスと行動上の問題】【生徒の援助希求行動】【学校と関係機関の連携】および【養護教諭による児童生徒への介入】に分類された。



【生徒の援助希求行動】について、中学生、高校生において、悩みを誰にも相談しない生徒は、相談する人と比較してメンタルヘルスの状態がよくないことや学校生活の満足度が低いことが示唆されている。高校生の相談先は、友人、親が多く、相談しやすくするための工夫について、「周りの人が気づいて声をかける」、「匿名で相談できるようにする」、「周りの人にわからないように工夫する」、「相談できる場所を増やす」などが挙げられた。中学生の悩みの相談先についても同様に、友人、家族が挙げられたが、家族に関する悩みについては、誰にも相談しないと答えた割合が多かった。

【学校と関係機関の連携】では、すべての校種で、医療機関、児童相談所、臨床心理士が多く挙げられた。小学校、中学校では、教育相談機関や教育支援センター、民生委員・児童委員、スクールソーシャルワーカーが多かった。連携に直接関わった人は、すべての校種で養護教諭、学級担任教師が多かった。【養護教諭による児童生徒への介入】について、養護教諭が児童生徒の精神保健問題に対応することへの彼ら自身の認識や障壁、精神保健問題をもつと思われる児童生徒のアセスメント、介入の内容、養護教諭が求めるサポートに関する研究等が挙げられた。

(3) 養護教諭による児童生徒への介入の内容について、国内文献9件が該当し、養護教諭の勤務校（重複あり）は、小学校3件、中学校4件、高等学校3件であった。それぞれの文献数が少ないため、学校種を合わせて結果を示した。心の健康問題をもつ児童生徒への養護教諭による支援のプロセスについて、心の健康問題のサインを捉えること、問題の予測、子どもの状態の把握、保健室での関わり、巣立ちの機会をつくることが挙げられた。養護教諭は、支援のそれぞれの段階で保護者、教職員、他職種等と連携を行っていた。

養護教諭は、子どもと普段から話しやすい関係をつくること、子どもを見守り続けることで、子どもの兆候を把握しようとしており、児童生徒の「日常生活の変化」、「態度の変化」、「繰り返す体調不良の訴え」、「話し方・表情」、「主訴と状態像の違い」、「頻繁な来室」などを心の健康問題のサインとして捉えていた。子どもの状態を把握するために、子どもを観察する、（普段と違う様子があれば）子どもに声をかける、子どもの話を聴く、記録から情報を得る、友人

から聴く、担任教師から情報を聴く、家族から情報を聴く等を行い、これらの情報を統合して、子どもの問題を明確にするように努めていた。また、子どもとの対話を通して、自我を補強する関わりや、子どもがソーシャルスキルを学習し、成長することを意識していた。

表 1. 養護教諭による支援のプロセス

1. 心の健康問題のサインを捉えること
2. 問題の予測
3. 子どもの状態の把握
4. 保健室での関わり
5. 巣立ちの機会をつくること 連携

養護教諭は、子どもを見守りながら、必要に応じて押す、無理な時は休ませる等を行っていた。遠足や学校行事等、子どもが保健室から教室へ戻れそうなタイミングでそのチャンスを活かす、友達に協力してもらおう等をしていった。また、子どもがメンタルヘルスに関する知識をもつ、自己の健康問題の解決方法を学習する機会をつくっていた。

保護者との連携では、家庭での状況や医療について聴く、学校での様子を伝える、保護者の相談にのる、本音を言える場を確保する等を行っていた。教職員や他職種との協働と連携では、養護教諭は、入学前の情報を得る、学級担任教師、学年主任、部活動顧問、管理職、学校医等の教職員間で日頃から情報交換やコミュニケーションを図る、学級担任教師と対応について共通認識をもつ、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーに相談する、ケース会議で支援のきっかけをつくる等を行っていた。

(4) 医療機関において、就学している年代の精神保健問題をもつ対象者へのケアについての先行研究では、発達障害、摂食障害、強迫性障害、統合失調症、境界性パーソナリティ障害などをもつ人などを対象とした研究が報告されている。それらの多くは入院患者に焦点をあてたものであった。

(5) 本研究において、就学している年代の精神保健問題をもつ対象者および家族への医療機関の外来におけるケアおよび他職種との連携について、看護職およびケースワーカーに半構造化インタビュー調査を実施した。その結果、外来において、看護職や事務職が待合室の様子をさりげなく観察し、対象者にいつもと違う様子があれば声をかける、対象者から訴えがあればこれまでのアセスメントに基づいて対応する、主治医や看護職、ケースワーカー、事務職などがその都度情報を共有し、適切な対応を検討する等が行われていた。これらの研究成果についてまとめ、発表していく予定である。

(6) 高校生の精神保健問題への養護教諭による支援と学校内外の連携について明らかにするために、高等学校に勤務する養護教諭を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。生徒の精神保健問題への養護教諭による支援について研究者らの検討を加えて、養護教諭による生徒の精

神保健問題への支援に関する介入項目リストを作成した。養護教諭の属性、勤務校の属性、養護教諭による介入項目リスト、養護教諭による生徒の精神保健問題への支援の内容、生徒の精神保健問題や精神障がいの特徴、養護教諭が精神保健問題をもつ生徒に対応する頻度、学校内外の教職員、他職種や専門機関との連携などについて自記式質問紙調査を行った。その結果、生徒の精神保健問題で回答数が多かったものは、対人関係の悩み、身体症状の頻繁な訴え、家族関係の問題、不登校などであり、生徒の精神障がいで回答数が多かったものは、発達障害、睡眠障害、うつ病などであった。これらの研究成果をまとめ、発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

河野由理、末続なつ江、養護教諭による小中高生の精神保健問題への支援に関する文献検討、病院・地域精神医学、査読有、61巻、2018、56-58

〔学会発表〕(計1件)

河野由理、末続なつ江、養護教諭による小中高生の精神保健問題への援助に関する文献検討、第60回日本病院・地域精神医学会総会、2017

〔図書〕(計1件)

上島国利、渡辺雅幸、榊恵子編著、河野由理 他、中外医学社、ナースの精神医学 改訂5版、2019、351-352

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。